

## 16 間欠自己導尿しながら社会生活を送る脊髄損傷者の排尿管理の実態調査

病院 看護部外来・健康管理室 中島美香 藤谷純子 米田征子

- I. 目的：泌尿器科外来では、患者から排尿管理について情報収集を行い、指導や情報提供を行っているが、障害の状況や生活環境などに合わせて独自に考えて排尿管理を工夫している印象を受ける。その工夫は排尿管理する上で安全性の低いものから高いものと様々であった。社会生活を送る脊髄損傷者が間欠自己導尿（以下 CIC）をどのように行っているか実態調査を行い、膀胱機能を維持するための介入方法を検討する
- II. 研究方法：1. 調査対象：泌尿器科外来を受診する CIC を実施している脊髄損傷者 85 名。  
2. 調査期間：平成 26 年 11～12 月。3. 方法：質問紙法。調査内容：対象者の属性・排尿管理に関する認識・排尿管理状況。4. 分析方法：統計ソフト SPSSvol.19.0 を用いて記述統計を行った。5. 倫理的配慮：所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。
- IV. 結果：同意が得られた 85 名に調査票を配布し、有効回答率及び回収率とも 100%であった。泌尿器科受診の目的は「物や薬をもらう」62 名（72.9%）、「脊髄損傷による麻痺のため症状を感じにくく、定期受診し検査して健康管理したい」18 名（21.2%）、「泌尿器系の既往がある」3 名（3.5%）、「代理受診や不規則の受診でも構わない」2 名（2.4%）、「新しい情報が知りたい」0 名（0%）対象者が CIC を実施している目的は、「自己導尿をするように指導を受けたから」44 名（51.8%）、「膀胱・腎機能の保護」36 名（42.4%）、「分らない」2 名（2.4%）であった。CIC 導入開始時に受けた導尿方法と現在の方法は、「変わった」が 67 名（78.8%）であった。回答方法を変更した 67 名中、変更後は、「精神的に余裕あり」（23 名）、「身体的に余裕あり」（22 名）、「時間的に余裕あり」（18 名）、「制限の軽減」（10 名）、「膀胱容量縮小」（10 名）、尿路感染（6 名）の順で多かった。（複数回答）
- V. 考察：泌尿器科受診の目的の結果から排尿は生活の一部であり健康感への結びつきが薄くなっていると考えられる。看護師は腎・膀胱機能の維持の重要性を説明しつつ、問題意識を持ってもらえるような関わりが必要であると考え。排尿管理の目的がわからないまま CIC を行うことは、合併症の少ない CIC の継続が困難であると考え。「医療者には、患者に CIC の原理とその必要性を十分に説明し納得を得たうえで、基本操作に従って合併症を限りなく抑えるように指導し、フォローする姿勢が求められる。」<sup>1)</sup> CIC 導入時より生活パターンを予測し、生活に無理ない継続できる排尿管理の指導が必要である。排尿管理方法の変更が、精神的・身体的なゆとりをもたらすだけではなく、腎臓・膀胱機能の維持の低下につながることもあると考え。又、変更した背景には CIC 導入時から社会生活の中での QOL を優先にしたことから排尿管理方法変更したと考えられる。
- VI 結論：排尿管理は脊髄損傷者にとって排泄行為の一つであり、CIC 導入時の方法を独自の方法に変更し排尿管理を行っていることがわかった。看護師は脊髄損傷者が独自の排尿管理にした背景を確認し、医師の指示のもと、患者に適した方法を指導していくことが必要である。
- 引用文献：1) 田中純子, 荻原綾子：すぐわかる！使える！自己導尿指導 BOOK 第 2 版 子供から高齢者までの生活を守る CIC をめざして, メディカ出版, 2012, P20.